

十勝岳活動の傳説と記録

柴 原 小 市

十勝岳の傳説、記録に就ては新開地だけに甚だ貧弱であるやうである、嘗て本道史の權威者河野常吉氏は大正十三年夏期東京地學協會主催の、洞爺、白老、夕張地方實地踏査會席上の講演で、アイヌの文化は何物も認めない、唯彼等が地名を残したに過ぎないと云はれた事を記憶してゐる。

然し大雪山(ヌタツカムシユベ)上に石鏃、石斧の遺跡の存在する事を考へても目と鼻の十勝岳が噴火活動してゐた事も彼等の間に早くから知られてゐた事に相違ないが、其名は個々別々で「オプタテシケ」と云ひ又ビビ岳とも云つてゐる。

勿論其名の起原を詳細に知ることが出来ないけれど、多くは噴火、或は硫黄に關聯するものではないかと考へられる。(近文アイヌの二三人

に就て調査)。

私はこゝに噴火活動の歴史等も比較的確實なものを舉げる事の出来ないことを遺憾といたしますが左の一篇を其内から撰擇いたしました。

今は十勝國帯廣の附近、音更(オモカ)に住む一老翁のアイヌがある、以前此アイヌは中富良野の酒造合資會社金田丸倉庫附近に住居してゐた者で、近文アイヌと富良野線の一驛邊別附近で鬭争を開始し敗戦の結果十勝音更に退却したものである。

嘗て中富良野法榮寺の住職、多家廣氏は汽車中で此のアイヌの話しを聞いたと云つてゐる。

其言葉に數十年前十勝岳の爆發によつて其泥流が其土人の小屋に及び家族三人之が爲め慘死したと云つてゐる、それは夜半であつて翌朝富良野原野一帶泥流と化したと云つてゐるが年代は

彼等の事であるから不明であるが、其土人の推定年齢を八十歳と見たのである、さうして彼が附近に腰掛けてゐた十七八歳の青年を指し、私しが是れ位の年頃であつた事を附言したと云ふ然らば十勝岳が約六十年前に於ても同一の噴火をしてゐる事を想像するに難くない。

私は第三回登山の際千百米線附近を起點として西方に流れてゐる三線の熔岩流（二線は美瑛村、一線は富良野村内）上の樞松七本の大幹の年齢を検した際平均五十二年を數へた事によつて前記土人被害當時に噴出されたものではないかと考へる。

當時は現今と違つて相當な密林帯を縫つた事であらうから流は之に支へられて今回よりも少なかつたに相違あるまい。無論泥流も伴つたと想像して。唯私は其時期が冬期であつたか夏期であつたかと云ふ問を持つて音更に其土人を訪ふ機會を今日まで得ない事を残念に思つてゐる然し火山活動が冬期に多いのを見て冬か春の始めではなかつたかと考へる。

然らば其際泥流も矢張融雪の結果でないかと思はれる。こゝに附言して置きたい事は富良野川の慘害地を瞰下す何人も森林の極めてまばらな帯狀の數線を見出すであらう。且又富良野に堆積された木材と今回押流されたと思はれるものゝ比較が案外少ない事に氣が付くであらう。またまつた部分としては精鍊所の上にあつた一丘陵地で他は沿岸の立木である。流域の變化によつて可成大樹を押流してもゐるし、附近にも押上げてはゐるが従前の流出區域を取つてはゐないかと想像される。

それと今一つは富良野川流域の所々に埋木の存在を見る事である、と共に平野の地下からは又埋木を掘出す事である（井戸等の底地）之は十勝岳が同一の事を繰返す事の何よりの證據ではなからうかと私は疑問を抱いてゐるのである次に夙に富良野に移住してゐた森氏の言によれば、明治七年三月にも小活動によつて火山灰を降らし、その後明治二十年及二十二年引續いて活動するまでは靜肅であつた事は明である。

變動としては單に私は最近五、六十年の調査の簡單なものしか持たない。

又此山が記録上存在してゐるものとしては田中館氏の「十勝岳爆發概報」にある安政四年四月二十七日、石狩詰足輕松田市太郎氏が石狩川上流から歸途此山に立寄つたこと、(石狩川水源見分書) 同年五月二十三日十勝岳麓に達した石狩日記の松浦武四郎氏以外には多くあるまい。

附記

上記田中館氏報文所載の十勝岳噴火舊記次の如し(編者)
(一)石狩川水源見分書(安政四年)松田市太郎著
安政四年四月廿七日石狩詰足輕松田市太郎は石狩川水源見分の歸途此山に登る、其記事左の如し。

一、字ワツカウエンベツ

ホンヒエより十町位なり。是より南方凡そ一里餘登り候處岩山にて難所凡一里半計り南へ登り候處一圓木類は見當申さず、東西北方共能見え申候。

一、燒山(十勝岳硫黄山のこゝである)

ワツカウエンベツより二里半計なり。但し此處五ツ目の山の北前の小山あり、それより東方五町計にして廻り九尺位の燒穴あり畑甚し。此小山の西方に燒山一ヶ所あり、燒穴の周リ凡一丈計り。此處宜しき硫黄を見受候間少々持參仕候。

卯の方見渡四里計にベツ山が見え、辰の方三里餘にビエ元山、寅の方五里餘にチヌクベツ山、丑の方六里餘に石狩山並にアンタラマ、子の方十里計りにチトカニウシ山、又亥の方遙向ふにウリウ山見え申候。

それより北方二里半を下り候て平林あり此處に溝あり字ソウベツと云ふ。それより戌亥に向ひ四里計り平林の方へ下り候て大川端(美瑛川岸)に出づ。

(二)石狩日記。松浦武四郎著。

松田市太郎踏査の翌月箱館奉行所雇東松浦武四郎も亦踏査せしが十勝岳の麓に至りしのみにて引返せり。其記事左の如し。

安政四年五月廿二日ベツの川筋に出で岩間に宿す。五月廿三日月影にて出足す堅雪の上歩行はかれども迂りて轉ぶこゝ各數度、四つ過ビビの麓へ出で爰にて回顧せば山半腹にして火脈燃立て黒烟天を刺上るを見る。土人の言にビビベツは此邊より漏出るが故に水に酸味ありさいへり。

此邊より岳嶮にして上り難し依て下るに七つ頃に木原に出づ。(下略)